

もうひとつの森 —“モノ”と“モノ語り”をつなぐ場所

文・写真
西 洋子

共同研究 ● 民族学博物館における表現創出を活用した異文化理解プログラムの開発
～多角的な場での“気づきの深化”のデザイン化～ (2008-2011)

“モノ”と“モノ語り”をつなぐ

梅雨入り後の6月5日、私たちは2回目の実験的な表現ワークショップ「インド刺繍～思いと出会う、願いでつながる～」を終えた。震災の影響で年度を越えての開催となり、しかも2日間で計画した内容を1日に短縮しての実施であった。当日は、インド刺繍を手がかりに、70名あまりの参加者の思いと願いが、身体とその表現を介して出会い・つながる“共創の場”が、エントランスホールのそこかしこに現れ出た。それらは、ホールの大窓の先にある万博公園の緑と重なり合っていて、私たちを包み込んでくれた。そして今年度、研究会はまとめの1年をむかえる。そもそもの発端を振り返ってみたい。

私がみんぱくと出会ったのは、10年ほど前である。展示場に居並ぶモノたちは、どれも鮮やかで、強く重く在り、しかも雑多であった。みんぱくは、そうしたモノたちが発するざわめきが混交し響き合う“聲の森”だと感じた。展示場を巡りひとつひとつのモノと出会う私の中には、さまざまな物語が浮かんで消えていく。目を転じてフロアを見渡せば、多様な文化が混在する閉じた空間から、また別の物語が自然に生成し広がるのである。時空を超え多くの人々の手をつたってここに在る“モノ”と、今ここで生まれ、在り続けることなく消えゆく無数の“モノ語り”の双方を混える場所、私はみんぱくの展示場のはたらきをそんな風に捉えた。同時に、私の中に小さな予感が芽生えた。それは、もしここに、消えゆくそれぞれの物語が響き合う“もうひとつの森”を創ることができれば、見えるモノの奥に静かに潜む、見えないモノ語りとの出会い、つながることができるかもしれない……。そんな喜びの予感である。以来、みんぱくが蓄えるモノとモノ語りのあいだに、多様な出会いとつながりを創り出すことで、異なる文化への新たな回路が開かれぬものかと問い続け、実践を重ねているのである。

しかしながら、展示場での淡雪のような予感は、掌中に形あるまま留まってはくれない。これを試みるには、どんなデザインを描けばよいのか。一体、何と何とが出会い、つながり合うことが必要なのだろうか、そもそも意味のあることなのか、いや、意味を問う以前に、研究などと対象化した途端に、損なわれ消え去る世界ではないだろうか……。答えはもとより、内にある予感や問いそのものを他者に説明する明瞭で十分な言葉をもたないまま研究会はスタートした。代表者としては、今でもこの点を大い



布になって、針になってあそぶ。

に反省し、申し訳なく感じている。それでも、人類学と工学、身体表現を専門とする20名あまりの研究者が集い、見えるモノと見えないモノ語りのあいだをつなぐ場所のデッサンが続けられている。スケッチブックの紙片は、机上に、議論での言葉に、自らの身体の実験に、さまざまな予備実践の現場とその省察に、技術を形づくる機械に、

うす高く積み上げられていくのである。

この年月、私たちは、議論や実験や実践を通して、モノとモノ語りをつなぐデザインのための、いくつかの視点を掴むことができたと考える。その多くは未だ自身の経験やワークショップでの人々の姿の中にあり、十分に整理できてはいないし、本稿の範囲に収まるものでもない。以下に、先人の優れた実践に裏打ちされた直感的な言葉の力を借りながら、少しだけ紹介したい。

博物館のセンス・オブ・ワンダー

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまでに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。(カーソン 1996)



博物館のセンス・オブ・ワンダー。

『沈黙の春』の著者であり、海洋生物学者のレイチェル・カーソンは、子どもが五感を通して自然と出会う大切さを説き、「知ることは感じることの半分も重要ではないと固く信じています」と語る。みんぱくのモノたちは、文

化と歴史に鍛えられた美しさや尊さを備えている。本来みんぱくは、そうしたモノたちと出会うセンス・オブ・ワンダーが満ち溢れる場所のはずである。しかしながら、現代の日本に暮らす私たちの感性は危うく、大人ばかりか、子どもも同様である。見えるモノの奥行きに、見えない物語の存在を感じ取る力を再生するためには、からだで感じる感性的な出会いの場のデザインが重要になることであろう。



からだで出会う、つながる。

同時に、人々がそうした経験をからだ全部で享受する、豊かな機会が必要になるであろう。こうしたモノとの出会いが叶えば、対象への愛情や、もっと知りたい、深く理解したいという欲求は、自ずと生じるのではないだろうか。研究を続けることで、そうしたデザインを構想する側には、何よりも自身のセンス・オブ・ワンダーを問い続け、常にからだから出発する姿勢でなければ、一本の線すら描くに叶わない、そんな自戒が私たちの心を強く覆うようになっていった。

お前が紙になれ

[...]お前が紙になれ、紙になれば紙がわかる。蜜柑になれば蜜柑がわかる。蜜柑の形容をいくら外から持ってきても、物理的・科学的に、今日はアトムの時代だから、原子的に考えてみたところが、蜜柑はわからぬ。蜜柑と一つになれば、それで蜜柑全部がわかる、というようなことを欧米人にいうと、蜜柑をどうしても外におく。どうして蜜柑になれようかと言う。客観的に分析的にものを考えるくせのある人は、それが容易でない。東洋の人のほうが割合にやりやすい。

[...]たとえば、ここに一つの紙片があったとする。[...]この紙片は、白いとか、字が書いてあるとか、薄いとか、四角いとか、あるいはこう二つに折ってあるとか、そして科学的に見ると、この紙が何から出来ておるのか、—炭素がはいってるだろうな、燃えるから。水素はないでしょうね、水気がないから。—とにかくそんなことで、この紙がわかったことになるんですな。ところが[...]そういう紙を外から見た話でなくして、紙そのものになれというのですね。(鈴木 1965)

禅者であり仏教学者である鈴木大拙は、分析的・客観的な見方によってモノを概念化する西洋的な捉え方に対し、東洋には別の見方が、つまり主体的に主観的にモノを見て、個人が生きている特殊性からモノと出会うつながり合う回路が自然に備わっていることを示唆している。私たちの共同研究会は、紙や蜜柑になる世界を求め、博物館での出会いとつながりのデザインを模索してきた。それは、いかにして私という特殊性でモノと出会い、私のモノ語りを紡ぐことでモノとつながり合うのか、さらに、いかにして個の物語を他者と交流させ、私たちのモノ語りを通して、モノへの個の気づきを深化させるのかという問いを、実践の場に集う人々の姿を通して深めるためのデザインである。モノを自分の外側において、分析的に客観的に眺め理解するわかり方があるように、なることでわかるわかり方も必ずあると信じて、身体のはたらき

に期待し、表現にかけてきたわけである。

ところが、研究を進めていけばいくほど、いくらそれを目指しても、まずは私たち自身に巣くう「外におく」習性から逃れることがいかに困難であるかを思い知らされるのである。頭では十分に了解しているつもりでも、議論を重ねるほどに、なる世界からは遠のいた実践へと向かってしまう。モノとモノ語りをつなぐ線は、そうした自己を

真に自覚しなければ、何ら形とはなっていけないことが、はっきりとわかってきたのである。

それにしても……。ワークショップでの人々の出会いとつながりは鮮やかであった。表現の場に集った雑多な人々は、インド刺繍というモノと出会い、自らのモノ語りを身体表現に託しながら、さまざまな出会いとつながりを重ねていった。人々とモノの奥にあるモノ語りとの出会いやつながりを支援したのは、私たちが描いた中途半端なデザインではなく、やはり身体のはたらきそのものであり、表現の力であったと思う。そのことが確認できて、本当によかった。それで足りない分は、戸外の眩しい緑が密やかに支え補ってくれていたように感じられる。

この年月の成果は、“もうひとつの森”が生き生きとした木々と重なり合いながら現れ出る瞬間を掴まえることができたことにあり、そこに大いなる生命を感じとれたことである。これこそ一枚一枚のデッサンを積み上げたことで、私たちに身体化され、その身体の中に見ることが許された世界なのではないだろうか。木々に見守られる場所、みんぱくでのまとめの1年がはじまる……。



モノ語りの世界で表現する。

【参考文献】

カーソン、レイチェル 1996『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳 新潮社。
鈴木大拙 1965『東洋の心』春秋社。

にしひろこ

東洋英和女学院大学教授。専門は身体表現論、舞踊学。研究と実践をつなぐ試みとして、子どものからだの表現の教育的援助、精神科入院病棟でのダンスセラピー等を実施。1997年より「みんなのダンスフィールド」を主宰。近年は、早稲田大学理工学術院三輪敬之研究室と協働し、共創表現を支援するメディア研究にも取り組み、国内外での展示・公演を行う。